



四十年代の蘆花

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-04-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大塚, 達也 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00010602

四十年代の蘆花

明治三十九年八月、蘆花は四ヶ月にわたる聖地巡礼とトルストイ訪問の旅を終えて帰国した。帰京後、青山高樹町に仮寓し、そこで『順礼紀行』を書き上げ、渡航前からの出版契約を果した。しかしその後の行き方については未だ模索中で、確たる方針を持ちえていなかった。が、キリスト教信仰の意志だけは強固なものがあつた。帰国した年の十二月、クリスマスを期して、個人雑誌『黒潮』を創刊しそれに日々の随感を寄せることで、今後の行き方を模索していった。翌四十年二月、浮華な都会生活を棄てて居を武蔵野の一隅千歳村粕谷に移し、そこを終生居住の地と定めた。以後の蘆花はそこで農と筆の半農生活に入り、自ら「美的百姓」と称して晴耕雨読の晩年を送ることになる。

ここでは、粕谷定住後の前半期、すなわち個人雑誌『黒潮』の発刊から『寄生木』の完成をへて「謀叛論」講演に至る四十年代に焦点をしばって、特に作家蘆花の変貌という点を問題にしてみたい。

1 「勝利の悲哀」

一体文学と云ふものは決して プロフェッション 職業とすべきものではありません。筆に依って生活するとなつたら、文学位危険千萬な

職業は無いでせう。

大塚 達也

これは二葉亭の談話ならぬ蘆花のそれなのだが、二葉亭との差異は明瞭である。蘆花の場合明らかに「生活」に力点が置かれているのであつて、二葉亭にその出所が帰せられる「文学は男子一生の事業とするに足るか」という発想とはこれは性質を異にする。蘆花は職業としての文学に危惧をおぼえているのであり、二葉亭のように男子がそれに一生をかける〈事業としての文学〉を懷疑しているわけではない。蘆花のそうした発想の根底には、「黒潮」中絶後、その続稿に腐心しながら、それに代わる短文数篇の埋草によつて米塩の資を得なければならなかつた時の苦い生活経験がある、と見てよいだろう。

右に引いたのは帰国後三ヶ月して、十一月の『文章世界』に載つた談話筆記の一節である。「書かざる所以」と題したこの談話は、小説「黒潮」中絶以後の蘆花の沈黙の弁明としてまず聞くことができる。

私は予め趣向も何も考へずに、いきなり紙に書く方で、勿論

清書も删上もしない、まア書きなぐりの方ですが、しかし之れは嘘ですね。矢張全体の構想も何もちゃんと定めて置いて、幾度か洗練しなければほんたうに宣い^{アツ}作物は得られないでせう。

「黒潮」の失敗は蘆花に余程こたえたと見え、『富士』のなかにも「社会主義の成案なしに社会主義を好む熊次は小説の成案なしに小説を書く人であった。一切の経緯結構を終えて着筆するかはりに、彼は水到渠成の法をとった。そこで彼の書くものは、往々にして行き詰まり、尻切れトンボになる事が多かつた」と記しているが、「水到渠成」式の創作法に「黒潮」行きづまりの原因が帰せられてゐる。実際、民友社時代からしばしば蘆花は連載物を中断し勝手に折筆している。蘆花の真価が、二葉亭も絶品と評したごとく、むしろ短文小品において發揮されているのも、水到渠成式の書き方に関連するものと考えられる。そのように見るならば、帰国後、個人雑誌を創刊してそこに日々の随感随想の短文を掲載することで再出発したことは、己をよく知る賢明な方法だつたと言えるかも知れない。

以上は実作にのぞむ時の自身の態度を述べたものだが、続けて日本の小説の内容を問題にし、それをロシアの小説と比較して次のように言っている。

概して我邦の作物は何うも明る過ぎるやうです。華かで軽く、悪く言へば浅薄です。露西亞の小説などを見ると余程趣が異ふ、彼国のものは全体が何となく重々しく濃厚で、必ず何物

か、裡に含まれてゐますが、我邦のは反対に非常に軽く明るく、表面の事実丈です。或は日本人の性質がかういふものかも知れませんが、其処へ行くとドストイェフスキーの「罪と罰」などは実に立派なものです。(中略)「アンナ・カレニナ」の中の、アンナが従妹と椅子にかゝつて話してゐる所に、袴の膝の所を簡単に写して、言ふに言はれぬ深い所を見せてゐますが、彼国の人はどうしてあ、いふ観察が出来るのでせう。吾々には想像すらも付きません。「罪と罰」の初の方にある居酒屋のあたりなども、実に旨いもので、唯々驚嘆する外ありません。

これは単なる感想にすぎないけれども、ここには漱石いうところの所謂「恐露病」以前の問題がある。それはロシア文学の精華^{エキス}の直感的把握(氣むずかしい批判的読み方以前の)という問題である。この種の問題は深くは触れないが、ひとり蘆花だけの問題ではなく、自然主義作家や二葉亭四迷、石川啄木らのロシア文学の実感的受容と関係してくるはずである。蘆花に関してだけ言えば、注意すべきは、この種の実感が巡礼行でのロシア風土の実地見聞による生々しい印象と固く結びついていることである。蘆花の口ぶりがかか二葉亭と似ているのは、実地見聞という点で両者が共通しているからだろう。

前引の部分の後にはじめて「書かざる所以」が語られる。

私も何も書かないといふ訳ではありませんが、何うも書くべき事実がないのに弱ります。見聞の事実が少しも興を誘はな

い。何事にも興味を有たないので。

いま蘆花の口ぶりが二葉亭のそれに似ていると言ったが、当時の『文章世界』の談話筆記者は前田晃であり、彼は明治四十一年のはじめ頃に二葉亭から「私は懷疑派だ」の談話を聴取筆録している。「書かざる所以」もあるいは前田晃の筆録によるものかも知れない。「私は筆を執つても一向気乗りが為ぬ」とは二葉亭の開口一番放つたことばだが、二葉亭のことばには〈事業としての文学〉に対する懷疑が深く蔵されているが、蘆花のそれはきわめて個人的な体験から出たことばである。

自分が書けなくても私は少しも驚かない許りか、人が書けなくなるのは寧ろ悦ぶべき事であろうと思ふのです。夫は真実に好いものを書かうと思つたら矢張り色々の境遇を経て来なければ可けまいと思ふ。で書けない人はつまり其人が修養の時期にあるので、書物も何も読まないであつても、書かないと云ふ事実が既に非常な修養だらうと思ふのです。

蘆花がこのように言うのは、蘆花自身の体験による。三十九年末の〈新生〉体験を経て次第に自己一個の内の生活に彼の目が向けられるようになった。「万の患は外にあらざして内にあり」(明39・11・?付、湯浅初子宛書簡)とも言っているが、ある意味で自己顕示欲の人一倍強かつた蘆花の、これは上すべりしがちな創作活動に対する反省として受けとめることもできる。「人の前に己れ、事業を

なさんとして足もとが留守になる癖有之候」(同前、傍点原文)ということばにもそれはうかがえる。

右の一文には自己の境遇をただちに他に及ぼそうとする蘆花一流の短絡的発想が見られるが、より注意を引くのは、蘆花自身目下「修養の時期」にあることである。かつてのように、書こうくとして苦心惨憺している姿はそこにはない。「書かないこと」に一つの意義、「修養」を見出している蘆花がいるだけである。蘆花の再出発が「修養」の結果の随感随想で始められたことは、小説「黒潮」の大作主義がもたらした作家蘆花の手痛い失敗を警戒する、自己反省によるものと考えられる。

明治三十九年八月巡礼行から帰つた蘆花は、その年のクリスマスを期して、『黒潮』と題した個人雑誌を創刊した。そして翌四十年の一月二十五日才二号を発行したが、才三号はついに出不ず、休刊の形で自然廃刊となつた。創刊の辞「月刊『黒潮』とは何ぞや」にその目的を記して「小生の随感随想を月毎に刊行するものなり」とし、結びで「書く事なければ何時にても休刊」と断っている。小説「黒潮」刊行の辞とはうってかわり、慎ましかで揚言をひかえているが、これもまた、小説「黒潮」がおかした如き挫折を警戒してのことだろう。

個人誌『黒潮』を「随感随想」の書としているが、内容はそれにとどまらない昂揚した精神に満ちている。帰国した年の十二月、蘆花は第一高等学校の弁論部に招かれ、そこで「勝利の悲哀」と題して一場の講演を行なつた。それは、日露戦勝後の精神的空白感を基調にして武力発展の迷妄性をついたもので、「一步誤らば、爾が

戦勝は即ち亡国の始とやらん」と警告、最後に「日本国民、悔改めよ」と結んでいる。いわゆる「戦後経営」「世界的日本の発展」意識に類せられ盲動せる時流に対する、それはまさしく予言的な一大警鐘であった。蘆花はその講演草稿をタブロイド版個人誌『黒潮』の創刊号に二頁五段全面を使い掲載している。蘆花自身「勝利の悲哀」演説をもって再出発の意を新たにしていたと思われる。

その講演というのはまず、巡礼行で蘆花がペテルブルグに赴いたとき、アレクサンドル三世博物館で見た、ロシアの反戦画家ヴェレスチャーギンのある一枚の絵のことからはじまる。それはナポレオンが焼土と化したモスクワを雀が丘の上に立って眼下に遠望している図である。その絵を眺めつつ、蘆花は「髻髻として茲に勝の哀、即ち勝利の悲哀を認め」たという。話は一転して、つい先日まで満州軍総参謀長であった児玉源太郎將軍のことに及ぶ。児玉は戦勝講和後の三十九年七月に急死している。蘆花はその死を巡礼行からの帰途、ウラジオストックで耳にしたという。続けて「生は思ふ。児玉源太郎將軍が奉天戦後の心機まさに雀が丘の奈翁に類するものありしにあらざる乎。(中略) 豈ただ児玉源太郎のみならんや。日露戦争の終局に当りて、一種の悲哀、煩悶、不満、失望を感じざりし者幾人かある」といい、次いで日露戦勝後の日本のことに及び、その戦勝気分を水をさし、そして、永遠なる神の摂理を思うとき「敗北も悲哀なり。勝利も亦悲哀なり。全き勝利も悲哀也。全からざる勝利も亦悲哀也」と勝利のむなしさをいい、「あ、寤めよ。我愛する日本、我故国日本、眼を開いて真の己を知れよ」と叫び、そして最後に「日本国民、悔改めよ」と結んでいる。

四海同胞主義に基づく人類的視野に立って武力発展の迷妄性をつき国民総体の覚醒を要請した、この蘆花の日露戦勝観は、彼自身にとつていわば戦後「非戦論」への「転向」をもの語るものであった。戦前戦中を通じて「戦争論者」の一人であった蘆花の変容をここに見ることが出来る。蘆花は日露戦争を「志士仁人の事業」(明38・1・10、近沢侃宛)とみていた。その彼が非戦論(戦争全廃、軍備全廃)を主張し出したのである。しかしながら蘆花のそれは言うなれば戦後「非戦論」であり、「非戦論」といえばすでに、日清戦争直後から日露戦争前後にかけて、三十年代第一線の思想家たちがもつぱら主唱してきたことである。だから蘆花の主張は何ら新しいものではない。しかも日清戦争を義戦としたことを自己断罪した内村鑑三のきびしさ激しさには遠くおよばず、国家の本質・矛盾に迫る徹底さにおいても三十年代社会主義者の非戦論に遠く及ばないと言われよう。

しかしながら、ここで蘆花一個の精神的必然に立ち入ってみるならば、非戦意思の標榜は再出発をする蘆花にとって不可避の関門であったと見ることが出来る。

一切の宗教に欠如し、若くは微茫にして基督教に炳焉たるものは夫れ「生命」乎。(中略) 基督教にして「生命」を離る、時は、即ち滅亡の時。(「生命」、『黒潮』一号)

ここに蘆花の「生命」主義的キリスト教理解がある。「生命」の共有感に基づく神のもとでの四海同胞意識が、「生命」破壊の戦争

を忌避する発言を生んだのだと言える。「如何なる名に於てするも、人を殺し人を殺さすは、人の情を殺すものである」(同前)、つまり「人の情」、人間的心情の自然な流露を抑圧するものとして、戦争否定が言われ、その戦争批判が「軍備全廢」「戦争全廢」の非武装絶対平和主義へと連結していく。その過程で、蘆花は国家の覚醒と個人の覚醒とを求めるのである。

こうした「生命」主義的・博愛主義的な非戦思想は、国家の犠牲要求に一たまりもなく挫折してしまふものであることは、我々の歴史に徴してはつきり言えることなのだが、蘆花にあっては実にそれこそが、後に「謀叛論」講演をよくなした思想信念であったと言つていいのである。

2 『寄生木』

『寄生木』は、その序文によると、蘆花が小笠原善平なる無名の一青年の委嘱を受けて、死後残された原稿を整理・刪正し原著者に代つて出版したものである。明治四十二年十二月、警醒社より刊行された。(どこを刪正したか、未だ不明である。)

作中篠原良平の仮名で登場するこの青年は、東北出身の日露戦争にも従軍したことのある職業軍人であった。その経歴は『寄生木』に詳しく書かれてある。その原稿は小型の手帳で都合四十冊にも及ぶ。(筆者―大塚―は岩手県の宮古にある蘆花記念館を訪れて閲読させて欲しいと係員に申し出たが、所蔵されてあるはずの手帳は、すでにどこかに移されていた。そこで観光協会に行き、どこにあるか尋ねると、まだ小説に登場する人物の遺族や関係者が生存してい

るので見せられないと言われた。研究者であることを告げると、写真版にしたものを数冊出してきて見せてくれた。とっさのことで戸惑ったが、『寄生木』の原本を所持していたので、蘆花特有のセンチメンタルな表現の箇所を探し出して、写真版の手帳と比較してみた。予想した通り、表現は原著者のそれと同じであった。後に小笠原善平の姉妹と印税をめぐる争いを起こすことになるが―『寄生木』を蘆花の手が加わったものとする説(勝本清一郎)には私は賛成できない。『寄生木』は原著者の来歴をほぼ忠実にたどっていると見てよい。

『寄生木』によると、彼は岩手県の一寒村に農家の次男として生まれた。父は村に自治制が実施されてからその初代村長になったが、彼の一刻な性格が士族の家柄を誇る土地の富豪の反感を買い、村長の失脚を謀るその陰謀に引っかけかかって、公金横領という冤罪を負われ監獄に送られてしまう。その後、家は村八分にあい、彼は村人たちから「未決の子」と蔑まれ、いたたまれない思いに苦しむ。そのため彼は一層奮起して、やがて小学校を首席で卒業、続いて高等小学校に入学し、父が保釈された翌年そこを無事卒業した。しかし十五歳になった彼は、将来の志望を決めかねていた。家にあつては肩身の狭い次男の身、(耕すに土地なく、水飼うに馬なき)身は、家においても仕方がなかった。そこでたまたま見てもらった易の卦に「雲上近き貴人に寄らば、天晴れ立身出世が出来る」と出たのに暗示をうけ、翻然郷里を出奔、軍人を志して乃木將軍(作中大木將軍)のもとに書生として身を寄せる。

その時彼は十六歳であつた。やがて將軍の世話で中央幼年学校に

入学する。その後は、將軍に代つて彼の世話をすることになった同姓の憲兵大佐のもとで、將來立派な軍人になるべく努力するが、そのうち大佐にみこまれ、愛嬢まで許される身となる。それ以来、彼女との関係は日に日に親しみを増していった。

しかし、そのことを伝え聞いた將軍は、大佐に向つて、はなはだ面白くないという態度を見せた。その時大佐は、早まった約束を後悔して、娘との契約を破棄しようと考え、ただちにそのことを彼に伝えた。彼はその破約を苦にして勉学の手もつかず、入学したとき優等第三席であつたのが、卒業のときは末席にまで落ちてしまつていた。そのため彼は旭川第七師団附に左遷されたが、そのうち士官学校への分遣が許され、再び出京し士官学校に学んで無事そこを終えた。やがて日露の開戦となり、第七師団も召集を受け、彼は出征した。そして間もなく凱旋したが、大佐の娘への思いは断ちがたく密かに彼女に会い、二人は結婚の意志を確め合つて、そのことを大佐夫妻に伝え、將來の結婚を許してもらふ。ただし、それには条件があり、彼が旭川に帰隊し陸軍大学へ入学したら——ということであつた。そこで帰隊後、予備試験を受け、彼は八人中第三席で候補者の資格を得た。が、師団側の人選で古参の大尉や中尉を優先することに、彼は一年だけ見合わせるようにと勧告された。そこで失望した彼は、とうとう身体をこわし休職を願ひ出る。その後、一切を放擲して上京し、彼女には他に良縁を求めて嫁ぐように言い渡し、外国語専門学校に入ってロシア語の修得を志すが、それもはかどらぬうちに病勢が悪化し、やむなく帰郷する。彼はそこで二十八年の生涯を閉じたのである。(ピストル自殺だつたとも伝えられている)

以上が篠原良平こと小笠原善平の生涯の概略である。

ところで、この青年が蘆花のもとを訪れたのは、再び序文によれば、明治三十六年四月頃であつた。三十六年四月といえば、蘆花はすでに蘇峰と決別して、自宅に「黒潮社」を営み『黒潮第一篇』を自費出版した、その二ヶ月後にあたる。その後の二人の交渉を書簡によつてたどれば、善平來訪の翌年、日露開戦の翌三月に、蘆花は最初とおぼしき小包を受けとり、その返書を認めている。また同じ月、彼の歩兵少尉進級を賀し、六月には再び小包を受けとり、その後も九月に二度、十月に一度、小包を落手したとの返書を送つてゐる。その他に、蘆花全集の別冊附録『落穂』には、出征を報告する善平の書簡(三十七年十一月廿九日附)がそのまま収録されている。その後、翌三十八年一月、戦地にいる善平に慰問を兼ねた返書を送つてゐる。その中で蘆花は、

戦争豈軍人の職務ならんや。亦吾日本の利益の為のみならんや。単に復讐の為にもあらず。一には大義を四海に布かん為、一にはまた露西亜其もの、覚醒と革新の為なり。即ち功名の為ならず、勳章年金の為ならず、真に志士仁人の事業として御精勵の程祈入候。

と書いてゐる。《志士仁人の事業》としての日露戦——このことは前章で触れた。ここで注意したいのは、蘆花が『寄生木』の編集にとりかかった時にはもはやそのような戦争観は捨てて、はるかに越えた所で思索をめぐらしていたということである。

右の文に続けて、「『寄生木』の事は必御挂念ある可からず」と記している。ところが、その年の暮に至つて、蘆花の方に「心裡に

革命」ということがあり、翌三十九年三月になって、原稿を一度返却している。けれどもその後蘆花は、ロシア語の修得を志ざして上京してきた善平を励ますため、彼の下宿を訪れたりして、何度か交わりを続けている。そのうち善平は身体を悪くして郷里に帰ってしまった。明治四十一年九月二十日、小笠原善平は死亡した。その後、再び蘆花が遺族の依頼を受け、『寄生木』ノートの編纂を引き受けたことが、序文にも書かれ、当時の書簡も残されているので、原著者との生前の約束を果たしたことは明らかであろう。

3 「謀叛論」

明治四十三年五月、いわゆる大逆事件が発覚し、当時の社会主義者が多数逮捕された。十二月になってその公判が開始され、年が明けた一月十八日に大審院判決が下り、幸徳秋水以下二十四名に死刑が宣告された。翌日、そのうちの十二名は無期に減刑となったが、残りの幸徳秋水以下十二名はただちに刑が執行され、絞首台の露と消えた。戦後、この事件が権力支配階級のフレーム・アップとしてにわかにな注目され出したことは周知の事実である。それにもない蘆花の「謀叛論」も、歴史叙述・思想史の上で、はじめて日の目を見ることになったのである。

「謀叛論」の講演草稿は昭和二年から五年にかけて刊行された『蘆花全集』第十九巻に全文収録されているが、当時全集の編集にあたった沖野岩三郎が、官憲の忌避に触れるのを警戒し、自粛して多くの箇所を伏字にしたため判読にたえないものになった。別冊附録『解題(19)』の〈附記〉によれば、他に「桂侯爵へ」「天皇陛下に

願ひ奉る」「難波大助の処分に就て」の三篇を収めるつもりだったが、三編とも検閲にかかり全文削除を余儀なくされた。そして末尾に「これは時期の問題であって、いつかは、これを発表し得る時期が来るであろうと信ずる」と沖野岩三郎は書いたが、果たしてその一篇「天皇陛下に願ひ奉る」は、昭和三十二年に野田宇太郎の手によって復刻された。(『明治大正文学研究』十月) また、「謀叛論」は、昭和四十年に、全集の伏字をおこして翻刻され、『現代日本思想大系』(筑摩書房)に収められた。戦前はこの「謀叛論」に触れることができなかったもので、蘆花の全貌を知り得なかつたが、戦後になってにわかに関光を浴び、幸徳事件が文学者に影響を及ぼした証拠の一つとして、歴史及び思想史がこぞって取り上げるようになったものである。

蘆花が幸徳事件に対し全身全霊を傾けて対応したことは何よりもよく「謀叛論」が語っているが、夫人愛子は日記の中でその姿を生々しく描写している。この種の事件に対する蘆花の関心は早くからあり、いわゆる「赤旗事件」(明41・6)以後はげしくなった政府当局の社会主義者に対する弾圧には、強い疑惑の念を抱いていた。明治四十一年七月二十八日附の蘇峰宛書簡には、「社会主義無政府主義者の如き単なる鎮圧は決して何等の効をも奏し不申と奉存候。当局に御心添の程奉願候。」とある。これに対し、蘇峰が政府当局者につけあつた形跡はない。大審院判決が下つた翌日の夫人の日記には、「書斎より吾夫、オ、イとよびたまふに、何事ぞといそぎゆかんとすれば、つづけて二四人殺すさうだ。書斎によれば、いつもく此事につき語り気をもみしが、何事ぞ二四人の死刑宣告!!

……」とある。また、減刑発表後の二十一日の日記には、次のように書かれている。

聖恩如海、一二名の減刑の詔勅下る。吾夫はまだ政府を利巧として多分残りも今数日を経て下るべし。二度にするなるべし。一度に悉くゆるすは寛に過ぎるやう見ゆればと。されど、幸徳及菅野のふたりは、若しくは大石の三名だけはどふもたすかりさうにもなし。ともかく兄君へ手紙認め、残り一二名の為尽力したまはん事を乞ひ給ふ。高井戸の東京便にたのむ。

その蘇峰にあてた手紙というのは、次のようなものである。

唯今新聞を披きて恩赦の十二名に限られたるに一驚を喫し申候。残余の十二名は時を隔て、特赦の恩命有之候都合にや。若死刑に処せらる、様の事ありては大事去矣。昔に豎子をして名を成さしめ松陰三樹の栄冠を彼等に冠らしむるのみならず、死刑の目的と正反対の結果を必然来し可申候。死する十二人は百二十人となりて復活し来るべく彼等が残年の計数に幾層倍して皇室の命脈は縮まり可申候。総明者揃ひの当局にはあまりの違算に候はずや。何卒一考速やかに桂総理にご忠告奉願候。

しかし、蘆花の嘆願をうけた蘇峰が助命に奔走した形跡はない。翌一月二十二日、一高生二名が蘆花のもとを訪ねてきた。その一人が故河上丈太郎（元社会党委員長）であった。彼は次のように回

想している。

玄関払いを食わされるのではないか、と心配していたが、書齋におおされて、用件を切り出したところ、一言の下に「よろしい」とひきうけてくれた。演説の相談になって、火鉢にあたりながら、蘆花が灰の上に火箸で書いた文字を読むと「謀叛論」と出ているので、ハッと思った。蘆花は「一高は不平を吐くのにいいところだ」ともいった。大逆事件のことだとすぐわかったが、学校へもどっても報告するわけにはいかない。揭示には「題未定」としておいた。

官憲の目に入れば演説中止を余儀なくされることを考慮して、「題未定」としたことは賢明な処置であった。

夫人愛子の一月二十五日の日記には、次のようなことが書かれてある。

吾夫の御眠り安からず。早朝臥床に居たまふ。折からいろいろ考え給ひ、どうしても天皇陛下に言上し奉る外はあらじ。……ともかくも草し見ん、とまだうすぐらきに、書院の障子あけはなち、旭日のあたたかき光のぞみて、氷の筆をいそいそ走らし給ふ。走らしつ、も其すべき考え給ふ。桂さんよりは書生の言を退けて一言の返事もなし。ともかく『朝日』の池辺氏、これも志士の後閑氏にたのみて、新聞に、陛下に言上し奉るの一文をのせてもらはん、と漸くかき終へて、一時比池辺氏への手紙と共に冬を高井戸に使い、書留にて郵送せしむ。

しかし、すでに二十四日朝、菅野スガを翌日に残し、幸徳秋水以下十一名の刑が執行されていた。蘆花の住む粕谷は、新聞の配達が一日遅れであったため、天皇への上奉文もはや手おくれであった。同じ日、「午後三時比新聞来。オ、イもう殺しちまったよ。みんな死んだよ、と叫び給ふに、驚き怪しみ書斎にかけ入れれば、已に既に昨二四日の午前八時より死刑執行!!!何たるいそぎやうぞ……(下略)」と夫人は記している。

かくして蘆花の天皇への上奉文は手おくれとなつてしまつたが、それを受けとつた池辺三山はそのまま手もとに保存することにしたため、事後も公表はされなかつた。

刑のすでに執行されたことを知つた翌日、一月二十六日の日記は、蘆花のやり場のない憤激を伝えている。

よあけ方嗚咽の声にめさむ。吾夫夢におそはれ給ふるや、と声をかけまつれば、考へて居たら可愛さうで、仕方がなくなつた。たゞため息をつくのみ。……

吾夫の所謂政府の謀殺!!とは實際なり。大石氏の「うそから出たまこと」実に其真をいひあらはすといふべし。小さな卵を孵化させて殺したといったやうな、お陰險なる政府の仕方よ。彼等も日本国民、其国民を愛する兄弟の一人ならずや。……

一月二十八日、蘆花は一高の演説草稿を腹痛をしのんで仕上げた。日記にいう「一高の演説草稿出来。先頭第一にき、得るものは、自

分一人、われは思はず手をたたきぬ。心からうれしくなり、幸徳氏等もつて瞑すべしと思ふ。腹痛をしのびて稿を草し給ふ。内なる内なる霊の声ノ」。

かくして、二月一日、一高において「謀叛論」演説が行われたのである。

「謀叛論」を企てた蘆花の意図が、「時の政府に謀叛人と見做されて殺された」幸徳秋水等がある意味で弁護するとともに、政府当局の「陰謀」を告発することにあつたのは言うまでもない。蘆花は幸徳等の弁護にあつたつて、まず、事情の真偽は知らぬが、もし判決通り大逆の企てがあつたとすれば、むしろ「其企の失敗を喜ぶ」と前置きし、彼等の行為を全面的に否定した上で、次のように言う。

彼等は乱臣賊子の名を受けてもたゞの賊ではない、志士である。たゞの賊でも死刑はいけぬ。況んや彼等は有為の志士である。自由平等の新天地を夢み身を献げて人類の為に尽さんとする志士である。其行為は佞令狂に近いとも、其志は憐れむべきではないか。

蘆花が秋水等の社会主義に対してどの程度の認識をもっていたか、未だ詳らかにしないが、おそらく一般的な理解にとどまっていたであろう。「彼等は、もとは社会主義者であつた。富の分配の不平等に社会の欠陥を見て、生産機関の公有を主張した。(中略)我等の政府は重いか軽いか分らぬが、幸徳君等の頭にひどく重く感ぜられて、到頭彼等は無政府主義者になつて了ふた。」当時の社会主義者

たちは権力側から無政府党のレッテルをはられていたのである。幸徳事件を契機に蘆花の社会主義に対する理解がより深められたとは言いがたい。「主義」など蘆花にとつてはどうでもよいのである。

彼等に対する蘆花の「志士」観がその儒教的意識から生まれたものであることは確かだが、必ずしもそれが蘆花の主観とばかりは言えない。幸徳秋水でさえその著『帝国主義』（明治三十四年刊）の中で、「而して今やこの愛国的病菌は朝野上下に蔓延し帝国主義的ペストは世界列国に伝染し、二十世紀の文明を破毀し尽さずんばやまざらんとす。社会改革の健児として国家の良医をもつて任ずるの志士義人は、よろしく大に奮起すべき時にあらずや」と述べ、帝国主義の打破を「志士義人」の活躍に期待し、自らもその気概をもつて対処したのである。また堺利彦は「週刊平民新聞」（明治三十六年十一月創刊）の「余は如何にして社会主義者となりし乎」に答えて、「予の社会主義は、その根底においてはやはり自由民権説でありやはり儒教であると思う」と述べている。そのように日本の初期社会主義は、その根底に「志士仁人は身を殺して仁をなす」という如き道義的抵抗心をひめていたと言つてもいいのである。

蘆花によれば、幸徳等は「自由平等の新天新地を夢み身を献げて人類の為に尽さんとする志士」だという。しかし彼等はもつと地上の「社会改良」を目ざしていたはずである。これを一挙に「人類の為」とするのは明らかに飛躍だが、蘆花の世界観からすれば、必然的にすべてがそこに行きつくのである。

五十余年前、徳川三百年の封建社会を唯一簸りに推流して日

本を打つて一丸とした世界の大潮流は倦まず息まず澎湃として流れてゐる。其れは人類が一にならんとする傾向である。四海同胞の理想を実現せんとする人類の心である。（中略）人類の大理想は一切の障壁を推倒して一にならなければ止まぬ。

「謀叛論」は確かに、秋水弁護の演説には違いないのだが、つぶさに見ていくならば、そこに、精神革命後いわば〈信念の更生〉を経て蘇つた蘆花の全精神が打ち込まれているのである。

人間が懺悔して赤裸々として立つ時、社会が旧習をかなぐり落して天地間に素裸で立つ時、其雄大光明な心地は実に何とも云へぬのである。

ここで〈人間が懺悔すること〉と〈社会が旧習をかなぐり落すこと〉とが、全くパラレルに言われているが、それは蘆花の内面で両者が同時に志向されていたことを意味する。

諸君、幸徳君等は時の政府に謀叛人と見做されて殺された。が、謀叛を恐れてはならぬ。謀叛人を恐れてはならぬ。自ら謀叛人となるを恐れてはならぬ。新しいものは常に謀叛である。

ここには「謀叛」という言葉のもつ不穏な響きがない。実力をもつてする対社会・対権力へのプロテストという強烈な響きがない。蘆花のいう「謀叛」によつて生まれる「新しいもの」とは、懺悔した赤裸々な〈人間〉であり、旧習を脱した〈社会〉なのである。